

平成31年2月4日(月)

今日は立春

今日は立春です。

「袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風やとくらむ」

出典「古今集 春上」 作者 紀貫之(きのつらゆき)

[訳] 夏の日袖がぬれるまでにして手にすくった水が、冬の間凍っていたのを、立春の今日の風が解かしていることであろう。

[鑑賞] 季節の推移を水の変化(水↓氷↓水)によって巧みに表現して、立春を迎えた喜びを詠んだもの。

[修辞] 「むすび」は「掬(むす)び」と「結び」との、「春」は「張る」との、「立つ」は「裁つ」との掛け詞(ことば)。

「結ぶ」「張る」「裁つ」「とく(解く)」は、「袖」の縁語。

[文法] 「むすびし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形。末尾の「らむ」は係助詞「や」の結びで、助動詞「らむ」の連体形である。「らむ」は「今頃は〇〇しているだろう」という現在推量の助動詞。

[語彙] 「ひつ」は水に浸すこと。「むすぶ」は手にすくうこと

古今和歌集は、平安時代前期に後醍醐天皇が紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の4人に編纂を命じ、延喜5年(905)から延喜12年(912)頃までに制作された勅撰和歌集です。(勅撰和歌集とは天皇の勅令によって編纂された歌集のこと)

日本最古の和歌集として「万葉集」があげられますが、天皇の勅令によっての編纂かは不明のため「古今和歌集」が日本ではじめての勅撰和歌集です。

全20巻からなり「万葉集」以降の約1100首の歌が収められ、その4割ほどが、読み人知らずの歌、2割以上が紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の選者4人の歌が収録されています。その他にも女流歌人の小野小町、平城天皇の孫・在原業平、遍昭の子・素性の和歌が収められました。

紀貫之は平安時代前記に活躍していた歌人で三十六歌仙にも選ばれ、優れた歌人です。「古今和歌集」では平仮名による仮名序を執筆し、日本で初めて平仮名で和歌についての歌論を残しています。

「古今和歌集」には自身の和歌を102首収め、また「古今和歌集」以下の勅撰和歌集には、435首の和歌作品が収録され、歌人の中でも最高権威者でした。

女性として書いた「土佐日記」は日本の文学史上初めての日記文学とされ、「土佐日記」以降も仮名日記文学や随筆を残し、日本の文学に大きな影響を与えた人物の1人です。